

---

# シュレッダー予備軍

志紅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シュレッダー予備軍

### 【Nコード】

N4587Y

### 【作者名】

志紅

### 【あらすじ】

連載のスピンオフや、色々短すぎる突発話。異世界ファンタジー、予告、その他短編中心予定。敏腕政治家な魔王様の話や、中年騎士の冒険などがあります。

いやな予感はあることなく（前書き）

以前短編に収まっていた話。

本当に若干の痛い表現あります。

いやな予感はあることなく

思い出したのは、お風呂に入ってるときでした。

あ、そういえば、書きかけのノートリビングに置きっぱなしだったなあと。ぼんやり思ってから、ハッとして。グツときてー。パツと目覚めるこゝ・・ってそれはどうでも好くって。やばい、って青ざめましたよ、ええ。それがなんでやばいかというと・・・、うちの母、リビングに置いてあるものは中身を確認して、家族それぞれにリビングに置くなって渡すんですね？人に隠さなきゃいけないようなことするな残すなっていうのが母の言い分でした。プライバシーも何もあったもんじゃないですね、今思えば。・・・それですね、そのノートがただのノートなら、よかったんですけれども。

——私の創作BLの、メモノートだったんです。

嫌な予感はあることなく

BL?ああBLっていうのはですね、・・・うんと、平たく言うと男性同士がいちゃいちゃしてる話のことです。——・・・なんですかその目は。BLは文化なのですよ?・・・まあいいでしょう。話が先に進みませんからね。それでええと・・・、どこまで話しましたっけ。——ああそれで、湯船から立ち上がってリビングへ直行ですよ。うちの母怖いですから。特に隠しごとに関してはね。

元の世界では私、物書きをしていたんですけれど。さすがにカミングアウト出来なくて、趣味でそういった話を書いていることは伏せて、ふつうの本だけを出しているフリをしていました。…それがいけなかったんでしょうね。堂々と話していれば何も言われなかったでしょう。けどまあ、もう遅くて。リビングに入った途端、こちらに背を向けて正座した母が、座んなさいって言った時の恐怖、あなたに伝わります?伝わりませんよね。そりやもう恐ろしかったですよ。背を向けていても分かる、怒りのオーラといいますか。そんなの抗える訳がないでしょう?大人しく座りましたよ。正面にきつちり正座して。全裸で。父も弟も家にいなかったのが、唯一の救いでした。——・・・それで、まあ、勘当を言い渡されました。とりあえず着替えてこいと。合い鍵返せと。勘当だと。…返事?イエスに決まってるじゃないですか。言い訳なんぞした日には、私は飛来するナイフを背に家を出ることになってましたよ。

お世話になりましたと三つ指ついて家を後にしました。まあ私もいい大人でしたしね。自分で稼いでるんだし、さっさと一人暮らしすべきではあつたんです。学生じゃあるまいし、第一私はそこそこ売れてましたから、それほどの打撃じゃなかったですよ。…経済的にはね。それで、さあこれからどうしようかとフラフラ道を歩いてたらね、うん。引っ張り込まれた訳です。こちら側にね。

…不甲斐ない話ですが、考え事に夢中で周りを見ていなかったら、なんだか灰色一面の私の世界から真緑の世界に変わりました。さすがに昼夜まで逆転したら気付くに決まってるでしょう。ここはどこだとキョロキョロしてたら、なにか見たことのない生物が襲いかかってきたんです。びっくりしましたねえ、アレは。——ま、このミカンさんが助けてくれてことなきをえたんですけれど。いやいや、お狐さんがまたたび好きとか、こんなに小さいミカンさんが化け物ぶちつと倒した時はさしもの私も呆然としましたよ。ええ。五秒ほど。…いたつ、こらミカンさん、噛まないでください。小さいって言ったのは別にバカにした訳じゃありませんってば。納得しました？ミカンさんはかわいいんですからそのサイズでいいですよ。あんなに大っきくなんてならないで下さい。

ああそれで、紆余曲折ありまして。ミカンさんに色々教わって、結果、

「この王都革命軍に入ることにしたという訳です。」

言って首を傾げると、彼らに一步近づきます。すると、それまで割と普通よりの態度で話を聞いていた勇者サマが、カタカタと震える剣の切っ先を私に向けました。

なるほど、私と同じく安全大国日本出身の、しかも私より年下の少女のハズですが、環境が変わり危機察知能力を上げざるを得なかったのでしょうか。だけれどしかし、

「?...なぜ私は危険と判断されているのでしょうか。」  
ふむ、と一瞬考えてから、思い当たる節があってポンと手を叩きます。それによってガランガランと音を立てて——血の付いた剣が手から滑り落ちていきましたが、構いません。警戒されるのは困り物ですからね。

けれど...私の予想とは違ったのでしょうか。彼女の顔色は少しよくなったようですが、警戒心はあまり薄れていません。はてと心の中に疑問符を浮かべると、少女は青ざめ震える唇で何かを呟きました。

「...はい？」

「——...れ、それ...。何、ですかっ...!」

それ、と言われ少女の視線を辿ると、...あつたのは我が国の宰相殿の、生首。

「ああ、警戒の原因はこれでしたか...。まあ今となつては必要ないですし、そーれっ。」

「——え、」

気の抜けるような——意図的にですが——声と共に指を振って、生

首をパツと消します。別にどこか違う場所に送ったものではありません。単純に霧を手で払うように、消したのです。ちなみに手のフリは必要ありませんでした。…どうせなら、ちちんぷいぷいってやれば良かったですかね。

「幻影ですよ。ここに押し入らせて頂くのに、一瞬怯んでくれないと難しいと思ひまして。——我々革命軍は、無駄な殺生を嫌うのです。…あなた方と違ってね。」

ちらりと隅に縮こまる国王夫妻並びに王子殿を見やると、奥方と王子はヒツと肩を震わせました。奥方は仕方ないとしても…王子殿は愚息ですねえ。確か第二王子は割と根性のある方だと記憶していますが、この人は王子なのは見た目だけです。両親を庇うような体で女の子を前線に立たせるなんて、乙女の夢をぶち壊してくれませうね。国王は単なるタヌキオヤジと思いきや意外と肝が据わっているようですが。

「革命軍というのは、勇者サマはただの難癖を付けてくる集団と教わっていたやもしれませんが、意外ときっちりした組織なのですよ？王政や王宮の周辺情報など、かなり充実している訳です。…だからね、私はココへとばされた原因を掴もうと革命軍に入ったのです。」

「とばされた…？」

不思議そうな表情をする少女に、思わず胡乱な目をしてしまいます。…いけません、私たるもの、常にポーカーフェイスであらねばならぬのに。

「——先ほどの話を聞いていましたか？…私が収集した情報から考えて…恐らく私は、あなたが召還される少し前に、国が実験に失敗

し生じた時空の歪みによってここにとばされてしまったと、そういうことになります。」

段々ヒマになってきたので、指から色とりどりの煙を出してくるくと飛ばします。…普通のも使えますがひねくれた魔法ばかり得意な私は、あまり火を出したりとか上手ではないのですけれど、こういった大道芸じみた技は上手いと言われます。——いえ、一通り使えるのですよ？ただ、普通に縄を結ぶはずが永久に解けない縄にしてみました、さっきの幻影もそう、あれは生首の幻影しか出せません。あと、料理をしようとして一度悪魔を召喚してしまいました。——結果的にミカンさんが食べようとして逃げていったのでまあ結果オーライですよ。

「私の、せい…？」

「いえ、あなたのせいではありません。やったのは全てこの国の人間です。まあだから、お気になさらず。」

「…貴様まさか、この世界にとばされたことを恨みに思っ…！」  
革命軍として我らを殺そうと、とわざわざ話の流れをぶったぎってこちらを睨みつけるのは、ご苦労様な長男の彼。だから、話を聞いていましたか？そして睨みはすれど動かぬあたり、やはり小物ですね。

「——そのこと自体を恨んでなど、いませんよ。私が呆けていたのも悪いのです。…情報収集は王宮内でもできたでしょうが、ここでは名家の出でないと面接をパス出来ませんから。」

「っしかし…！」

「うるさいですねえ。こういうえはいいですか？…そのこと自体を恨んでなどいない、しかしこの国としての有様にはほんと呆れ果てたと。」

指から出る煙をとび回ってぱくんとくわえ、けれど捕まえられずに首を傾げるミカンさんに口元が綻びます。実にかわゆい。――…つてああ、今日は何やら表情が崩れやすい日です。これまでの皆のがんばりをやつと実現できると、やはり気持ちが昂ぶっているからでしょうか。

貴様…！とかなんとか王子がいつてますが、ガン無視。とりあえずまだ向けられていたお嬢さんの剣の切っ先をそつと手でよけてミカンさんのもとへしやがみ込みます。さらさらと美しい毛を撫でるとミカンさんは目を細め、クウンと声を漏らしました。昔は動物はそんなに好きではなかったのですが、ミカンさんはかわいくて仕方がないです。賢いし、美しいし、かわいいし、かつこいいし、強いし、かわいいし。

ていうか、いい加減思ひ出話するの疲れしました。

最終的には勇者の彼女に関しての目的と関連してくるので、ただの時間稼ぎというだけでも無いんですがね。もうそろそろよくないですか。私は早く帰りたい。そして幹部の美少年ツインズの絡みが見たいのです。

ぼんやり思いながら色んなことを総スルーでミカンさんの頭を撫でていると、ピクリとミカンさんの耳が反応しました。ちらりとこちらを見上げてくるミカンさんに頷き、失礼します、とその右瞼に触れます。

目を閉じる必要はありません。頭に流れ込んでくるデータと画像と、あと最後に添付された俺すごいでしょ的なメッセーじに適当に目を

通して、3…じゃなかった、4人に向き直ります。

「さて、お喋りはここまでにして。——マクリアド・リーン・アレキサンダー王。」

ありがとうと呟き手を離すとミカンさんがクルル、と満足げに喉を鳴らして肩に登ったのを確認してから、先ほどより幾分堅い声音で国王に声を掛けました。

「申し遅れました。——私、王都革命軍リーダーなどつとめております、<sup>フォン</sup>風と申します。」

「…なんと。」

驚愕の眼差しで見ってくる国王に、皮肉げな声で残念ながら、と返してやります。…もちろん私も彼の立場なら驚くでしょう。それ程年嵩な訳ではありませんし、私がここへ来てまだ三年もたちません。そんな新参者を、と思うのは自然なこと。しかし私のこの物言いは、王の言葉に違うニュアンスを感じたからです。そう——女がか、という。

「それでも私、卑賤の生ながら元の世界では神童と言わせしめた女です。ご納得頂ければ幸いに存じます。——さて、」

女、という部分を強調して言って、目を閉じます。ああ、私はどう

やら思っていた以上にこの王が嫌いなようです。

目を閉じたのは、先ほどの情報を彼に転送するため。逃れる術はなく、脳に直接送り込まれるというのは殆どの人が体験したことのない感覚でしょう。案の定、王も眉をひそめ、そして驚愕に目を見開きました。

「——いかがでしょう？」

「……どこで、これを。」「ああ、この部屋には防音魔法を掛けたから、お気付きになりませんでしたか。……今この城には、」

革命軍が乗り込んできています。

静かに告げた言葉に、部屋の者は皆呆然としました。だあれもここに来ないのを、不思議に思わなかったのでしょうか？

「な、んだと……。」

「そんなことをして、ただですむと……！」

「——思っていないませんよ。だから、物的証拠を、今、提示しました。」

「は……、」

「っ！」

「……商人から賄賂を受け取っての人身売買の黙認、違法逮捕、絶滅危惧種の虐殺と密輸入エトセトラ。——まさかこんなに証拠が出てくるとはね。」

「なに、を……。」

「父上…？」

「国王、様、どういっ…。」

一気に顔面蒼白になる国王陛下と、奥方。それに反して呆然とする息子殿と勇者サマ。ああ、やはり奥方は関与していたようですね。

「——私の仲間たちが、地下の隠し部屋や陛下の寝室などからそれらの取引の証拠を大量に発見いたしました。全国民に配ることも出来るくらいの、貯め込まれた金品もね。」

ガクリと床に膝をつく、国王を見下ろし笑います。こういった役はあまり好きではないのですが、向いているし避けられない事なので仕方がないですね。

「既に周辺国そして“世界の天秤”にはコンタクトをとりました。もうまもなく先ほどの証拠もあちらに転送されるでしょう。」

なるべく余裕綽々な感じでそう言い切ると、床にくずおれた王の肩が揺れ始めました。

人の感情をある程度予想するのは得意です。この後のきつと陳腐な展開は、大体予想がつかしました。

「ぜ、なぜ…。異世界から来たお前が、そのような余計なマネを…！お前が、お前さえ来なければっ…！」

がチャリと床に落ちた私の剣を拾った彼は、私に猛然と向かってきます。鬼の形相で、もはや人とは思えぬ奇声を上げて。

数秒の後、ブシュ、というイヤな音と女性たちの悲鳴が聞こえ、私は閉じていた目を開きました。腹部に、鋭くも鈍い痛み。

「——やめてください。」

ハッハッと荒い息で固まる国王の体に、血液を通して練り込んだ麻痺の毒を流し込み、その身を軽くトン、と押すと、王は為す術なく床に倒れていきます。——ああこれでは、私の声も聞こえないでしょう。あなた！と叫ぶ奥方の声が、どこか遠くに聞こえました。

「この痛みは滅びゆく王国の怒り。それは変革者の長として、甘んじて受け止めましょう。しかし…どうかせめて、愚かしくも堂々たる王として、我らの記憶にあってください。ただの愚者にはならないでください。——王国最後の、王として。」

静かに言い終えた私のお腹を、ちろりとミカンさんが舐めてくれます。ゆつくりとふさがってゆく傷を眺めながら、やはりぽつりと眩きました。

「王よ…たとえ私がこの世界へ来ずとも、きっと変革は始まってい

ましたよ。城下町より外の様子など、あなたは見たこともないのでしょうけれど。国という巨大な陰に脅かされし人々を私はずっとこの目で見てきました。その渦中にいた人々は、とても多く…密かに存在していたのですから。」

実際私もその影響で狙われましたよ。いえ、私が、というよりミカンさんが、ですが。

ミカンさんはこの世界ではエトロと呼ばれる超希少種でけっこう色んな人に狙われるのですが、力が強大すぎて捕まえるなどまず無理なのだそうです。けれどエトロは人になかなか懐かない分、誰かに懐けば命を賭しても守ろうとします。加えて頭がいい。だから、私を人質にミカンさんを脅したのです。多分…商人に雇われた人間でしょうね。生け捕りは難しいですが、エトロは死した体にも凄まじい魔力が宿るといいます。私と引き換えにミカンさんを殺す気だったのでしょうか。

—…まあミカンさんはどうやら、分かったわ、私の命で助かるなら…！という健気タイプではなく、死ぬなら一緒よ！ミカン、いつきまーす という無謀タイプだったらしく。

——勝算はあったのですよね？私は信じていますよ？あとついつい女性口調になってしまいましたか、ミカンさんは女の子なんでしょう。男の子なんでしょう。調べてないのでよく分かりませんが。まあとにかく、それ以来私は超希少種のミカンさんが狙われる…つまりそういった生物を買う人間がいるこの国の実態をしり、暴力的な魔法も覚えようと。強くあらねばと思うようになり、革命軍に入ることを決めたのです。

そんなことを考えながら勇者サマへと向き直ると、少女…と王子殿は、驚いた顔で私、正しくは私の腹部を凝視していました。……あれ、勇者はともかくなぜあなたまでびくりしてるんです？エト口の力は有名でしょうに。——…ってああ、そういえばミカンさんにちよつと目くらましの術をかけてましたね。まあ触ればわかる程度の幻覚ですが。面倒くさいので説明はしませんよ？

「さて、勇者殿…名をなんと？」

「…コマチ、と。」

「なるほど…ふむ。小町さんですか。」

「——え、」

パチンと指を鳴らして、小町、の所から日本語に切り替えると、小町さんは驚いた顔をしました。いえ、何やら片言で話しづらそうでしたのでね？会話の中でも先ほどから単語ばかりでしたし。ちなみにまたしても指を鳴らしたのに深い意味はありません。

「な、なんで日本語を…！？」

「嫌ですねえ、とばされたと言ったじゃないですか。しかも私は黒髪黒目で、彫りも深くないでしょう？加えて、この子“蜜柑”さんですよ？」

名を呼ばれたとフサフサしたしっぽを振るミカンさんもかわいですが、戸惑った表情の小町さんも何やら動物的でかわいらしいです。「言われてみれば…。で、でも、お名前、フォン、って…。てつきり中国人辺りかと、」

「ああ、それは偽名ですね。」

「偽名！？」

「？ええ、戸籍はないので偽る必要はありませんが、五十嵐楓いからしかぜかと

名乗ったら、皆さん発音しづらそうでしたので。元の世界では一度も初対面で呼べる方がいなかったので少し残念でしたが、“嵐”と“颯”の風からとって、風<sup>フオン</sup>と。」

「なるほど。」

納得した表情を見せる小町さん。なるほど、確かにかわいらしいです。取り巻きがいるというのも理解できますね。ところで日本語では何を言っているのか分からない王子がうるさいですが、放っておきましょう。あなたも母上を見習って大人しくしていなさい。これから真面目な話をするんですから。と口封じのまじないをかけると、

…なんか視覚的に更にうるさくなりましたね。まあいいでしょう。

「——さて、と。小町さん。」

「…はい。」

「我々は、あなたが魔王を倒し、帰還するときまで待ちました。何も知らせないままあなたが信じるこの国を滅ぼせば、あなたはきつと復讐に生きてしまう。それにあなたは賢い方です。下町の悲惨な現状も、うすうす気付いているだろうと思っていました。」

「…すみません。」

「いえ、謝らなければならぬのは、むしろこちらの方です。私たちは押し付けられた理不尽な要求からあなたを救うことすらしなかったのですから。あなたがそんなことまで背負い込む必要はないのです。——それで、あなたが戻って来れば王国側の強大な戦力になるうという意見もありましたが…。それでも私はあなた方が戻って丁度2ヶ月後、と決めました。」

「…なぜ、ですか？」

「——理由は、2つあります。」

そう言つて私は指を2本立てました。その片方をミカンさんがあぐあぐかじっているので何とも格好が付きませんが。

「1つは、図らずもこの王国のために、年端も行かぬ少女が命を賭して魔王と戦つたということに、国王が改心するのではないかと……少しだけ、期待したのです。」

「……。」

「そして、もう一つは。——あなたの意見を真つ向から聞き、怒るならそれもよし、それを受け止めようと。そして出来るならば、……あなたのこれからを共に考えようと、思つたからです。」

じつとやや色素の薄いその瞳を見つめても、小町さんは目を逸らしませんでした。賢くて可愛いだけでなく、強い子です。私と向き合うのは緊張すると、よく言われるのですけれど。

「あたしがどちらに着くのかと、そういうことですか。」

「端的に、言えばね。」

「……私が、国王に着くといつたら、」

「敢えてなのかクリアリオ母語で云われたその言葉に、王族の皆さんがパツと顔を上げます。こんな若き少女に頼つて、恥ずかしくないでしょうか。」

「——その時は、革命軍リーダーとして……私が全力でお相手します。」

「

「——……そうですか。」

「……こんなやり方はずるいと、分かっています。けれどあなたは、ずっと国の満たされた場所にいて、そちらの方の言い分だけを聞いてきた。だから、そうでない所もあると知つて、そして……、」

「こちら側で、これからも生きてほしいのです。」

背を向けて私に向き合う小町さんの表情は、彼らには見えていないでしょう。けれどその言葉から、王は何かを察したようです。王子は未だに顔を希望にきらめかせていますが。

「…なぜ、」

震える声。唇を噛んで目を閉じた小町さんは、一体何を思っているのでしょうか。

「なんででしょう。」

「なぜ、あたしが戻って来ると…？みんな、ダメ元って感じて…。万一倒せばラッキーなんて、そんな雰囲気だったのにつ…！どうして、」

「そうですねえ、敢えて理由を挙げるのなら、日本人という民族が与えられた職務は必ず全うするからでしょうか。―…というか、まあ…、」

決意を込めた瞳に向き合って、私は静かに笑いました。

「あなたが帰って来なければ…、革命は起こさないつもりでしたから。」

「え…。」

「今言つてもi fの話ですから、信憑性などないかもしれませんが。……でもね、私は、我々は、あなたを見殺しにした国の一員として、幸せになる訳にはいかなかった。」

「——っ！」

「子供たちには罪はない。だからそれだけ申し訳なかったのですが。……あなたは、私とは違う。望まず異世界に来たのは同じでも、あなたは望んで先導者となったのではない。国の誰もが、どうにかしてあなたが命懸けで戦うのを、召喚されるのを、防ぐことが出来たはずだった。……誰もそれをしなかったのに。結局異界の少女一人を見殺しにしたのに。のうのうと幸せになる訳には、いかなかった。」

ただ、それだけのことです。

充血した眼は、見ない振りをして。私はそつとまだうら若き少女に手を差し出しました。この腕が切り落とされようと、もう覚悟は出来ているのです。

「——一緒に、いきませんか？」

細く白い少女の手がこちらに伸ばされるのを見て、私は微笑みました。

いやな予感はあることなく（後書き）

どうしても補足したいのでしておくと、颯柊は小町が帰ってこなかった場合、王族を巻き込み自爆する予定でした。

そんな話まですると押し付けがましいかなあ、と思い、颯柊は小町には言っていない。

以上、予想外に長く&余白が少なくてすみませんでした…；

追記：指摘や感想など頂けたら幸いですー（・・）ー

## KAMITUKI

ピピピピピ、と、機械的な音がした。

それに小さくため息について、男は鳴りやまぬ小型機械を手取る。

「……もしもし？」

『ヴァンライド様でございますか？』

「ええ、そうです。」

『初めまして、私皇子付き秘書のトガネと申します。お噂はかねがね。』

「……どうされました？」

『いえあの、……実は……』

少し戸惑いを含んだ声で秘書が伝えてくる話に相槌を打って、もう一度ため息をついてから男は返事を返した。

「……了解しました。すぐにそちらへ向かいます。」

『ご面倒をおかけいたしましたして、申し訳ありません。——ところでヴァンライド様、』

今まで関わらずには来たものの、よくよく振られてきた話臭い切り出し方に男は小さく首を振る。

「……悪いですけど、政治的悪だくみには俺は協力できかねますよ。……ではこれで。」

『あ、ちょ……』

引き止める秘書の声を振り切るようにブツリと通話を切って、男は機械をテーブルに放り投げた。予想より早く時期が来たことにイラ

イラと髪をかき乱すと、ふと違和感を感じて手をおろす。

「……はああ……」

右手に絡まった茶黒に、男は深くため息を吐いた。

\*

月の美しい夜だった。

部屋の中央の椅子に座り機嫌良さげにふんふん、と鼻歌を歌うは……金髪の青年——帝国第二皇子リトアイルである。月を見上げて目を細め、何かを待つように目尻を撫でてうつすらと笑う様は明らかに異様であった。けれどそれを指摘する者は既に人払いされたこの部屋にはおらず、青年の小さな笑い声だけが響く。

——青年は機嫌がよかった。何事も全力で楽しむくらいのある彼はそれが常ではあったが、それでも久々に“存在して”いられることに心が浮き立って仕方がない。月の光だけではない……。大いなる力が次第に増しているのを感じる。だからこそ、自分はいつもより早く顕現出来、そして……

「……おや、思ったよりお早いお越しだ。」

「……わざわざ待っていて頂けるとは光栄だな。」

かの高名なる黒騎士殿が、発現に気付けなかったのだから。

感じた気配と聞こえた声に青年は椅子から優雅に立ち上がり呟いた。振り返った先にいたのは、予想通り慟然とした表情のもう青年とは言い難い見た目の男で、青年はにっこりと微笑んでみせる。

「君はボクのお客人だからね、歓迎するのは当然さ。」

「……長居する気も、長居してもらう気も全くない。さつさと皇子の体から出て行け。」

剣呑な表情で、殺気を出しつつ青年を睨みつける男。同時に抜かれた剣は月の光を反射して眩しいほどに輝き、青年の顔を微かにゆがめて映し出していた。しかし青年はそんな脅しにも全く頓着せず、呑気に揚げ足をとる。

「それは正しくない言いようだよ？ボクはこの身と完全にリンクしている……一時的に封印することは可能なれど、出て行くなど無理だね。」

そして、と続けながら、青年はふわりと笑い、向かってきた銀の切っ先を交わした。かすかに音を発した空気に揺れた金髪が数本、はらはらと床に着地する。

「——もうすぐ“僕ら”はそれぞれの宿主の体を支配する。それは、  
…どんなときか分かっているのだろう？大騎士シエル。“僕ら”に  
唯一対抗しうる男よ。」

歌うように言った青年に男は齒噛みした。相手にすらされていない。  
その事実もちろんあるが、それよりも青年が言った言葉に焦りを  
感じていた。

「…やはり、…」

「ふふふ、そう、時は近い。その時事実にもっと近い君はどうするの  
か、ボクは今から楽しみで仕方がないよ。」

「…余計なお世話だ。」

「あはは、そうだねえ。——…それにしても、シエル。」

楽しそうに笑った後微かに不思議そうに首を傾げ、いきなり話題を  
変えた青年に男は眉を寄せる。

「君、本当にマメだよねえ。」

「…は？」

「いやいや、そこまでヒトが好きなのでもなさそうな割に、随分  
とマメにボクの封印に来るよなあと思っただけ。」

「仕方がないだろう。…対抗出来るのは、俺だけなのだから。」

ため息を吐きつつそう言い捨てると、男は一瞬きょとんとした後す  
ぐに吹き出した。——一体何が起きた。というか、どこか面白い所  
があったのか。

「ぶ、く、ははは…！」

「何が可笑しい。」

「いやいや、――…君には、これから起こり得る事態を見過ぐす、という手はないんだなあ、と思つてねえ。」

「…黙れ。」

「くくく、…じゃあ今日は、君のその愛国心に免じて大人しく帰るとうしようかな。」

「……別に愛国心なんかでは、…というか、は？」

二度目のは、である。笑う青年が自分から帰ると言い出すことなど、これまで一度もなかったことだ。そんなに俺の発言がツボだったのか、と男は眉をひそめた。

青年はそんな男に構わず椅子に腰を下ろしたが、ふと思い出したように顔を上げる。

「ああ、そうそう…ボクは楽しければ何だっていいからね、これだけ穏和に行くけれど、」

何が穏和なものか、初対面で力試しと嬉々として襲いかかってきたくせにと男は思ったが、表情には出さない。元々鉄面皮で通つているし、青年は気付かなかったようだった。

「――他の連中はこうはいかないよ。彼らは忠誠心に満ち溢れてるからね。……ま、精々、」

頑張ることだと言つた怪しい気配が、段々と霧散していく。男はゆるゆると溜め息を吐いてから部屋からきびすを返し、秘書だと言つたトガネに魔法で文を飛ばした。さすがにあの会話の後で平気で話

せる太い根性はしていない。

ギィと音を立ててドアが閉まり、そこに寄りかかって男——シエル・ヴァンライドは静かに笑った。

「……言われなくても、」

“精々” 頑張つて見せるさともう一度笑つて、男は王宮の長い廊下を歩いていった。

KAMITUKI (後書き)

つづく

…みたいな。

続きはありません(きっぱり)。

お初にお目にかかります。(前書き)

短編「Bad taste」の少し前の話です。

…ん？

少し綴りが間違っているかも…。

お初にお目にかかります。

「…ということなんだけど、」

理解出来るかい？と、“彼”は言った。

なにしろ寮に戻る途中にいきなり連れてこられた俺は、この状況の意味が分からない。

「…新しいタイプの拉致か？何やら地面が光ったようだったが…。」

「ああ、そうだったね。まずはこの世界のことを説明しないといけないわけだ。」

ぼそりと呟き続けられた内容は、とうてい信じがたい物だった。

「魔物、魔法、貴族…いったいどんなおとぎ話だそれは。」

「まあ君たちの世界は近代的なものね。ディファーマリアはかなり熱心だし。」

「…そこが一番の疑問なんだが、…ええと、」

ん？と言いたげな顔で首を傾げる男に、さすがの俺も言いよどむ。

それでも静かに口を開いた。

「神さま、…だと？」

「うん、そうだよ。僕はそこまで力の強い方じゃあ無いんだけどね。」…これは現実か？」

あっさり肯定されては逆に理解しがたい。しかめっ面をすると、彼はますます楽しそうに笑みを浮かべた。…まずそこからして疑問なんだ。彼が目の前にいるということその物が。

「…じゃあ、その自称神様が、」

何のために俺なんかを？

呟いた言葉に、彼は愉快そうに今度ははっきり声に出して笑う。なんかとはまたご謙遜だ、と言って。

「東藍民主主義共和国陸軍第四部隊曹長、通称“狂犬”くん…だったかな？君の武勇伝は全て、僕の頭に入っている。」  
「……。」

揶揄するように自分の頭を指さしてから、相変わらず楽しそうに彼は続ける。

「“なんか”というには…余りに華々しくて血生臭い経歴だね？」

からかう視線にため息をついてから、俺も口を開いた。

「全部知られているというのはいいい気はしないが…まあこの際仕様ががない。で、あなたは俺にいったい何を求める？」

神だという存在に色々（何故言葉が通じるのかだとかここに連れてきた方法だとか）突っ込むのも野暮だと率直にそれだけを尋ねる。返ってきたのは頼みたいことがあってね、という簡潔な一言だった。

「…神様が、か？」

「だからこそさ。僕では干渉できない、いや…しちゃいけないことだね。“神々”の最大のタブー。だけど、君を介してならギリギリokかと、ね。」

「——なるほど、」

だからこそその自分か。ひそりと呟けばどうやら正解だったらしい。その通り、と頷かれた。

「…誰を？」

「いやあ、明確にこの人を、という訳じゃない。  
」

ふわり、と彼が浮かべたのは優しげとは言い難い笑み。察しが良くて助かると目を細められ、神様ってこんなものなのかと俺は苦笑した。

「ストーリー通りに、“お話”が進むよう、僕が指定した人を……消してほしいんだ。」

明言。

危険かつ迂闊なことだ。これが俺の世界なら録音されて言質とられて脅されるだろう。それにしても随分月並みな言葉だとぼんやり考えていると、彼は更に続ける。

「異世界より来たる勇者の話を…知っているかい？」

—…きつと俺にこの絶対神からのお願い、否メイレイを拒否する手だてなど無い。出来ても多分犬死にで。

—ならばせめて。

「…聞いたことがないな。」

遠まわしの肯定に、悪趣味な神はその笑みを深めた。

お初にお目にかかります。（後書き）

実は薨のトリップには、神様たちの色んな思惑が絡んでいました。

そこまで書ききれませんが。

## 勇者様の受難（前書き）

短編「unfaithful」スピンオフです。

個人的にずっと書きたかった話。

## 勇者様の受難

巻き込まないで欲しいと龍斗は思う。

魔王を倒す旅の途中で仲良くなったドラゴンに乗せてもらい、放浪の旅に出てもうすぐ3日がたとうとしていた。…はいそこたいしてたってねえとか言わない。

龍斗はそもそも事なかれ主義である。そのおかげで実は魔王と対決すらしていないが、まあそれは丸く収まったし今の話には関係ないので置いておくとして。話を戻すと龍斗は出来れば魔王を倒すのも無事終わったことだし、後は一般人として何事もなく悠々自適に暮らしたいと思っていた。

——だが。

“リユート…もしかしたら気付いてたかもしれないけど、あなたこのままだと国の英雄として無駄に祭り上げられるわよ。”

さらりと編み物片手に言って教えてくれたのは、豪胆で知られる巫女……エルクだった。ぶっちゃけ周りの人達の中で一番このmあばばばば。

……それを聞いてああやっぱり、と思ってしまった。そんな空気は自分も少し感じていた。採寸させると言われたり、何やら急に絵師と面会させられぜひ肖像画をと言われたり、違う国のお偉いさんと対談させられたり。

衣食住を提供してもらっている身で、しかも実際魔王を倒した訳でもない。プラスしてもう一つ負い目のある龍斗は、仕方がないと受け入れていたのだが。……それが一生続くかもしれないとあらばまた話は別だ。

やらないと殺されかねない雰囲気だったから魔王討伐も引き受けたが、大してこの国に思い入れもない。加えて自分を慕っているような顔をしていた仲間たちも、きっと国から伝えられていたろうに何も教えてはくれなかった。……龍斗が好きなあまり、伝えたら龍斗はこの国を去ってしまうと考えた結果だろうとエルクは言っていたが、真実はわからない。

そうして割とあっさり旅立つ決意をした龍斗に、エルクは更に驚きの発言をしてくれて。

“私も連れて行ってくれない？”

——……巫女エルクがこの国の神であるディアスノア……俗に言う“万能神”の妻だというのは、少し前に本人から聞かされた話である。その旦那と何かあったのだと……容易に想像はついた。

理由を聞くとエルクは渋々ながら教えてくれて。――…なんというか…当人たちにとってはそれで済ませていい話ではないのだろうか。

――これぞまさに、なんとかは犬も食わないと言う奴だなど、龍斗は思った。

「……はあ……」

ばちぱちと目の前の焚き火がはぜる音を聞きながら、眠るエルクの横で頭を抱える。

実は昔、というか異世界に来る折りに、龍斗は神に会っている。その時やたら力説されたのが――エルクという巫女には絶対に手を出すな、ということだった。会ったというか正しくは夢の中に意志だけが流れ込んでくるような感じで、声だとか見た目だとかは知らないのだがまあその分更にエルク自慢…いや今思えば散々ノロケられてひたすらウザかったのを覚えている。

……だから初めてエリクに会ったとき、好みの巫女様がエルクと名乗ったのに一人撃沈していた訳だが。

その時は巫女だから神に愛されているのだろーと思っていたが…エルクの衝撃告白後、あれはそういうことだったのかと妙に納得してしまった。

——つまり、エルクに自覚はないが、彼女は旦那に相当愛されている。

だから多分、浮気というのも…三流メロドラマじみた理由があるのだろう。

例えば、エルクは若干冷めていてツンデレの気があるので、ヤキモチを焼いてほしかった、とか。それにしてもやりすぎだとは思うが…。

……。

うああああ！と叫んで髪をかきむしる。なんか色々とそろそろ限界である。悪いのは旦那の方だが、これ以上バカップル…否バカ夫婦の痴話喧嘩に巻き込まれたくはない。

だいたい非リア充男子にラブラブっぷりを逆に見せつけるんじゃないやねえ！と叫びたかったが、これ以上大騒ぎするとエルクが起きるのでやめておく。

「ああもう、ホント…別世界でも何でもいいから、助けてくれよ神様。」

ていうか旦那、お前神様の癖してエルクのこと見つけらんねえなら俺が説教してやろうかコラ、とぶつぶつ呟いて、けれどそれも次第

に虚しくなつて溜め息を吐く。

ゴロリと地面に寝転がるが、どうやら興奮しすぎて眠れそうにない。

畜生、と悪態を吐いて、元勇者は静かに寝返りを打った。

## 勇者様の受難（後書き）

勇者の事情がかなり入っちゃいましたが、まあ何となくあの二人の実態？を理解していただけたかな。

魔王に関してはまた後で別話としてあげます。というか書きたくてうずうずしております。

あ、ちなみに女性です。

リコールの準備はお済みですか？（前書き）

多少の流血？表現あります。

一応“勇者様の〜”とリンクしております。

リコールの準備はお済みですか？

「——ようこそ、勇者さん。」

ノックもなしに部屋へと飛び込んできた青年とそのお供たちに、あたしは嫣然と微笑んだ。全く…相手が魔王だからって礼の一つもつくせないのはどうかと思うんだけどね。

頬杖をついてイスにゆったりと腰掛けたままでいると、あたしのような女が魔王だという事実への驚きから復活したらしき彼らがやいやい言ってくる。あらあら、喋る前に攻撃の一つもしなさいってのよねえ？思いながら指でつい、と空をなぞると、彼らはピタリと喋るのを止めた。あはは、大したことないこと。そのままくると宙で指を回すと…彼らはゆっくりと部屋の中心へと集められていく。

——1人を、除いて。

「な、何を…？」

不思議そうに口を半開きにするのは、いいけれど。こういう時にあたしを叩くのが戦いのセオリーじゃないのかしら？あたしは戦うのは余り得意ではないから、よく分からないけど。

「さて、と」

問いには敢えて答えないまま一行に顎をしゃくつてやると、頷いたヴァルド——あたしの部下で魔族なんだけど…が、彼らを外へと運び出しに行った。

「！あんだ！」

「ああああ、そう気色ばまないでちょうだい。戦うつもりはないの」「え…?」

一気にいきり立ったはずの勇者さんは、怪訝そうに構えた剣を少し下げた。なんだか気が抜けるわ。――…まあ、ともあれ。

「戦闘ではない、そう…、きわめて政治的な話。外交ね。」  
戸惑う勇者さんににこりと笑って、告げる。

「――有沢龍斗さん、我々と取引をしませんか?」

さあ、準備を始めましょう。

リコールの準備はお済みですか?

ドン、と大きな音が城内に響いた。何事だ、敵襲かと兵士たちは

色めき立つが…しかし。

「ごきげんよう、人間の皆様…」

ふ、と王宮の廊下で上品に微笑むのは見知らぬ女であった。ただ城に訪れたならばきっと丁重にもてなされたに違いない、高貴な雰囲気すら纏う美女だ。長い黒髪に理知的な青の瞳。誰もが感嘆の息を吐きたくなるようなその美しさに不釣り合いに…彼女の背後の窓は割れ、そして。

「…怪我は？」

「大丈夫よ、」

傍らで心配そうにするのは、明らかに、人間ではない。形は人のそれでも禍々しい気を纏う、魔族の男だった。

「な、んだ貴様ら！」

「魔族…！勇者、リユート様は…、」

「バカ、リユート様は旅に出られている！」

「クソ、こんなときに…！」

慌てて剣を構える兵士たちにも、女は眉一つ動かさない。そうかあの勇者は、と頭の中で少しだけ考えて、けれどすぐに小首を傾げて…笑う。

「少し、出る場所を間違えたわね…。移動しましょ」

「ああ。…こいつらは？」

「ムダに消すのはよくないわ。とりあえず、」

つ、と女が宙で軽く指を振ると、兵士たちは一点に集められた。ハッとして動こうともがけど、空間ごと拘束された彼らは動けない。またね、と目を細める女が消えたのを、誰もが為す術もなく見つめていた。

＊

「さて——…こんにちは？」

静かに微笑み視線を向けても、王の顔色は優れない。困ったわ、突然部屋に現れたのがいけなかったのかしら。…なんて、それだけの理由ではないのは知っているけれど。ひ、ひ、と息をもらし背後の壁にはりつく王にため息を吐く。何にしても、視線が自分ではない人間にばかり向いているというの、あまり好かないのよね。

パチンと指を鳴らすと背後で鍵の閉まる音がして、王は悲鳴じみた甲高い声を上げた。怯えた視線がこちらに向いたのを確かめてから口を開く。

「ごきげんよう、王様——。あたしはユラ、現職魔王、よ」

「…そ、そんな筈はない！」

最上級のあたしの笑みに一瞬見惚れていたようだったけれど、王はハッとして叫んだ。まあきつと、勇者——龍斗はそんなこと言わなかったでしょうしね。だから旅になんて出たのかしら？

「あら、なぜ？」

いかにも分かりませんという顔で目を瞬かせ首を傾げると、吃りながらも王は言った。

「き、貴様は…、勇者であるリユート様が倒したはずだ！一行の者もそれを確認している、生きているはずがない！！大体、お前のような女子おなこが魔王など、」

「侮らないでくれるかしら」

刹那。

抜いた短剣を首筋に当てひたひたと動かす。確かに肉弾戦……ていうか戦闘全般得意ではないけれど、元の世界ではお嬢様だったもの。護身術くらい習得してるのよ？首を動かさずに横目でそれを見つめる王の様子は見ていて楽しいが、汗が不快。伝ってくる冷や汗にあたしは眉をひそめた。

「女だから？…何かしら。——そういう物言い、大嫌いなもの。」

「ヒッ……！」

「——ユラ、」

顔を近づけ目を細めたあたしに、寄り目になる王。それを少し非難するような声を上げたのは、

「……ヴァルド」

「目的を忘れるな。早く用件を済ませろ」

という割にはこちらの事情には殆ど興味なさげに欠伸をもらすヴァルドに苦笑する。早く帰りたいだけなんですよ。

「そうね。——…じゃあ、王？」

「は、はひい！」

眩き短剣を首からはなして一歩下がる。ぺたんと尻餅をついた王は、こういう場面に慣れてないわけね。

「——…あなた、私の下につきなさい」

「は……？」

見下してそう言ったあたしを、王は呆氣にとられたように見上げた。どうしたの、理解できない？と、敢えて不思議そうに目だけで問いかける。

「な、にを言っている！！仮にお前が魔王だというのは、信じるとしよう。しかし、魔族の者の下につけたと……！」

信じられないと首を振る、なんて。死と隣り合わせじゃないと危険に気づけない愚か者なのね。そういうのってスマートじゃないわ。

「……ユラ、」

イライラと再び短剣を握り直すと、諫めるようなヴァルドの声。……お見通しって訳ね。

「はいはい分かってるわよ。……王、それはつまり、我らが大国に対抗するということ？」

しょうがないから顔を引き締めて、国王に問い返す。返って来たのはどうしても隠しきれない異種族への侮蔑のイロ。

「は……、大国だと？魔族など、まとまりのない村ともいえぬ集団であろうが。こちらには勇者殿もおるのだぞ。あの方が戻ってさえくれば、貴様等など……！」

虚言妄言大言あと虚勢を張るのはどうやらお得意なご様子。——だけど。

「“村ともいえない”？……本当、嘗めないで欲しいわね。あたしが魔王として君臨する以上、そんな状況にはさせないに決まっているでしょう」

やれやれ、と大仰な動作で両手を広げ肩を竦めてから、左手でつうと宙に円を描く。するとその空間に穴があいて、あたしはやおらそこに手をつ突っ込んで漁った。ないなとしかめっ面をしていると、凄く嫌そうな力才をしたヴァルドがぼそりと呟く。

「……何度見ても慣れん。気持ち悪い技だ」  
感心したように言わないで欲しい。

「失礼ね、全く…と。ああ、これこれ」

けれどそんなことは気にせずに、あたしは驚く王の前で神を広げて読み上げる。

「ええ、と…。——“バレティゴ王国国王陛下殿。急なお手紙となり誠に申し訳ありません。しかしこれは急を要する用件であり、慌て筆をとった次第にございます。突然のことに戸惑われるやもしれませんがこれは人類としての大いなる進歩であり、またユラ王と共に国をまとめ上げてゆくことは必ずや平穩への道に繋がります。つきましては”……」

そこまで言ってパチンと指を鳴らす。空気が微かに疼くように動いて、巻き起こる風が髪を飜いだ。

「——どうかご英断を？陛下」

轟、という強い音。

強く吹いた風と共にあたしの長い髪と、それから大量の紙の束が宙に舞った。ヒラヒラと舞い降りてきた紙の一枚を慌てて掴み、王は、そして絶句する。

「な…、ステルフォン帝国、ノイラド共和国、それにマリドナ公国だと…！？」

その手にあるのは全て、そう、王国への“英断”を求める手紙。

「分かってもらえたかしら？大小30の国家、この世界の主要な国の全てが…我々の“側”についている。あなた方を、除いてね」

クスリと笑うと、王はかすれた悲鳴のような声を上げた。

「そんな、バカな！戦争が行われた様子などない、なのはどうして…！！」

「ええそうね、だって戦争はしていないもの」

「、は…？」絶句する、年老いた権力者。危険すぎるこの世界にいと、何事も暴力でしか解決できなくなるのかしら。やっぱり中庸が一番よね。…けれどこれは、この絶句は、当然の事かもしれない。地球という枠ですらこんな風になることはこの先もきつとない。

「まあでも、今日はそんな話をしに来たのではないのよ、…“中枢の狸”さん？」

ふわりとまた笑顔を浮かべ、博愛主義的に両手を広げる。笑顔は外交において凄く大事よ。言葉が通じなくても簡単に行為を示せるから。ま、それでもその裏の裏を疑って行かないといけないのがこの世界なんだけどね。

「既にそれらの国は、ベルフィオラ連合王国として一つになっている。…さて、30以上ある国々の中で最も広大な領地と権力を持ち、大陸の中心に位置するバレイゴ王国、国王にここで問題です」

いち、と口の形だけで呟いて、あたしは指を一本だけ立てた。

「…“中心”、“中枢”に位置する王国は、全ての方向からの侵略を防がなければなりません。それは可能でしょーか？」

「貴様…っ！」

憤りぎりつと奥歯をかみしめる王に、と口の端をあげると、ちらりと視界に写ったのは、窓の外を退屈そうに眺めながら欠伸をするヴァルド。あなたさ…抑止力って自覚あるの？

「幾ら世界最大の国とはいえ、その他全ての国相手に、勝つことなんて可能でしょーか？」

敢えてのアホっぽい語尾。ニコニコと二本指を立ててあたしは一心に王を見詰めた。

「そうやって、他の国も…！」

「ああ、何か勘違いしているようだけど、こんなことはしていないわ」

こんな乱雑な方法は…ね。

さん、と言つてまた一本指を立てる。これはさっき思い付いたんだけどね。

「…しばらくしたら帰る、と告げた勇者サン。だけどその行き先は？理由は？しばらく、は…どのくらいかしら？」

ザツと青ざめる王。それはそうよね、勇者さんがいなければこの国の戦力は半減。魔族に対抗しうる人間など、そうそういはいしないもの。ま、今までずいぶんなことをしてきたわけだからそのツケが回ってきたんじゃないかしら、と他人ごとの様に心の中で意地悪く笑つて。あたしはまた首を傾げた。

「あたしは第72代魔王、由羅・V・ベルフレイン。全ての質問の答えを知つて、それでも我らに立ち向かうというならば。——…」

べろり、見せつけるように唇をなめる。

「連合国全て、受けて立つわ。思うまま蹂躪してアゲル。」

「…っの、悪魔…！」

「あら、失礼ね。ただあたしは、この世界をより良くしようとしているだけ。」

「何が…！野蛮人ごときが為政者の真似事など、片腹痛い」  
わ、と言う前に、その首はゴトンと音を立てて床に沈んだ。あら、と目を瞬かせると、それからため息を吐く。後ろを振り返ると、とんでもなく不機嫌な力才をしたヴァルドの手が血に染まっていた。

「…野蛮人では、ない。それは寧ろこいつらの方だろう」

何か弁解は、というようにじとりと睨むと、観念したのかヴァルドは顔を逸らしてようやくそれだけ言った。あーああ、血が付いちやったじゃない。ハア、とため息を吐くと、ヴァルドの肩が微かにピクリと震えた。たぶん無意識だけど。

「…まあ、いいか。民衆の怒りとか…まあ、うん。なんとかなるわよね。というか、むしろ金食い虫を倒したワケだし…、感謝されるくらい？——あ、そういえば、王は確か入り婿…。王族じゃないのなら、王妃さえなんとか出来れば、うん。よし、——」

顎に手を当ててブツブツと思索して、やっと考えがまとまり顔を上げる。ヴァルドは胡乱げな力才だったけど、自分が計画を狂わせたことは自覚しているのか何も言わなかった。でも別に、コレも選択肢の一つではあったしそんなに狂ってはいないのだけど。

横に放置されたままの首を拾い上げて目線をあわせる。びちゃ、と足元で嫌な音がしたけれど、仕方がない。でも服が汚れるのはさすがに嫌なので首の止血。

「——あたしは、異界より来たりし魔王。ドイツ系日本人貴族ベルフレイン家の次女にして、そう…力をもって国の頂点に立つはずだった人間。——あなたとは、」

ひたり、乾いた口唇をその額に会わせると、その部分がボウツと淡い青に発光し、宙に浮かんだ。それを見て静かに笑い、踵を返す。

「格が、違つのよ」

——さあ、世界征服といきましようか。

（強いのは、体だけではないでしょう？）

（“ただの暴力”ではない力は？嫌いなもの）

（だから“そうでない力”を、ね？）

## リコールの準備はお済みですか？（後書き）

出来は悪目でした。ちよつと「いやな予感」と被っていますが、これはあつちを考える過程で思い付いたなので内容が薄いですね。

とりあえず設定はまだありますが人物設定を下に。

### 《由羅・V・ベルフレイン》

近未来の日本出身、ドイツ系日本人。貴族のお家のお嬢様で、昔は政治家を目指していただけあり努力派の才女。今は周りの魔族の陰もあつてそうでもないが、恐らくそのまま現世にいたら独裁者になっていた。金持ちだけど偏見は何もない、究極の実力主義者。でも見下しはする（誰でも）。

黒髪碧眼、顔よし頭よしスタイルよしのまさしくイイ女。でも少し考えが至らず精神年齢が低い。ただし残酷ド外道。

…こんな感じです。魔王召還についての設定がまだまだ詳しくあるので、後でupしようと思います。

ここまで読んでいただきありがとうございます。誤字脱字、指摘などありましたら是非m（――）m

少年 A

「――俺、アンタらみたいな奴が一番嫌いなんスよ。」

ニヒルに笑う男の声を最後にオレの意識は途切れた。  
苛立った様にこちらを見下ろした彼の名は、何といったか。

例えば仮に――少年 A と、しておこう。

少年 A

互いに熱く愛し合うような。そんな関係だったのかと聞かれば、  
きつとそんな綺麗な物ではなかった。

中小企業の社長の子供同士、将来それ相応の相手と結婚するのだと言われて、また自分でもそう思いながら育ってきて。行き着いた先が彼女だった。

それだけのこと。

多分彼女も、同じ様な環境で、同じ様な気持ちで過ごしてきたのだろつ。

違いといえば俺は男だけれど彼女は女で、その分縛られるものが多い位だと、彼女はそう言って笑っていた。

二人共まだ若くて、その関係性は将来の結婚相手、というより友達のソレに似ていて。

だから愛し合うことこそなかったけれど、分かり合える存在だった。

\*

“—理由なんて、なかったんだって”

彼女が壊れたことに。否、壊されてしまったことに。

たった一文、ぽつんと一面の白の中に残された文字は、彼女の身に起こったことを、そして彼女の気持ちを知るには十分すぎて。

天井から下がった彼女の体の下で、俺はその文字を目で追いながらひたすら胃の中の物を吐き出し続けていた。

愛していた、訳ではなかった。打算で仲良くしてられる程、大人だった訳でもなかった。

それでもただ、大切だった。

俺が、もっと強ければ。強ければ守れたのだろうか。

俺と彼女が愛し合っていたら、彼女は一人で狂乱し、抱え込むことはなかったのだろうか。

俺のことを頼り、彼女を支え、笑いあえていたのだろうか。

真っ黒い壁の向こう。パチリとはぜた彼女の断片に、拳を握りしめた。

理由なんて、なかった。

誰に敵と思われようと、同類…味方だと思われようと、罵られ唾を吐き捨てられようと。

そこに至った経緯に、理由なんてなかった。

ただもう、彼女のように誰かをなくしたくなくて。  
俺のように誰かが哀しむことにたえられなくて。

彼女を忘れたくて、或いは忘れない様に。俺は拳を血で染め上げた。

そして多分、不良と呼べるようになってはいたのだと思う。それでも俺は、ギリギリのラインで踏みとどまっていた。

——せめて彼女が綺麗だと困った様に笑っていた、その色だけは変

えたくなくて、彼女を殺した概念に近付きたくないという気持ちも、ずっと強く残っていたから。

互いに熱く愛し合うような、綺麗な関係では決してなかった。

それでもいつのまにか、俺は彼女に依存し、頼り、きっと懂れていた。  
傷をなめ合うように。

本当の友達のように。

彼女の笑みを見た、最後の日。

——俺は、どうしたらよかったのだろうか。

恵まれた境遇にありながら、どこまでも弱く、欠落していた俺たち。

例えば足りなかったのは、

（愛とかいうものでしょうか？）

愛シテミマスか？

YES

NO

## 少年A（後書き）

短編から移動しました。

文字におこすと厨二病ちっくな乱文＆超絶短文にここまでお付き合  
いいただき、ありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4587y/>

---

シュレッダー予備軍

2011年11月23日14時55分発行